

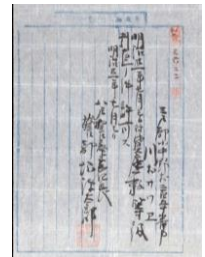
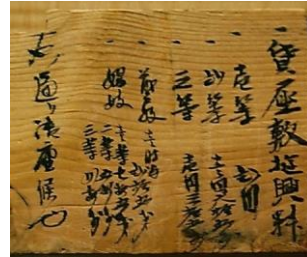
# 新むつ旅館（元新陸奥楼）

青森県八戸市

しんむつりょかん（もとしんむつろう）



東北一と謳われた八戸の遊廓は度重なる大火で衰退したが、小中野新地に1896年（明治29年）新設された。元新陸奥楼（現新むつ旅館）は1899年（明治32年）に八戸警察署の貸座敷許可を受けて新築された。戦時中、新陸奥楼は兵隊の士気を高めるために取り壊しを免れた。戦後、売春防止法を受けて1958年（昭和33年）に新むつ旅館に転業し、現在に至っている。元貸座敷の特長を残す貴重な建物として平成19年に登録有形文化財（建造物）に指定された。元貸座敷の建物として、特別に豪華な設えは見られないが、初代女将が働く女性の健康や幸福を願って施した細やかな心遣いの意匠に感服させられる。大らかな現女将が語る由緒や当時の生活に関する説明は、拝聴に値する



左：土蔵の墨書 貸座敷遊興料が書かれている  
右：八戸警察署による貸座敷許可証

## 見どころ

### 【小中野新地の八間道路】

小中野新地の広い八間道路は、かつての遊廓の賑わいを思い起こさせる。

### 【外観】

妻壁のブリキや白い汚れに小中野公害、二階軒の電燈や黒漆喰に蓄積された歴史を読み解ける。

### 【内部空間】

ソラ窓(天窓)からの光に照らされた帳場とY字階段と空中歩廊と二階回廊の吹き抜け空間

### 【意匠】

初代女将が働く女性（娼妓）の健康や幸福を願い、設えた七宝紋様・鱗紋・蝙蝠紋・瓢箪紋など

### 【貸座敷資料】

八戸警察署の貸座敷許可証を始めに、来客の風体を記録した遊客帳や大人の玩具など



【Y字階段と空中歩廊】

二階の貸座敷には、帳場からY字階段で上り、三途の川に掛けられた橋（空中歩廊）を渡って貸座敷（天国）に赴く。



【帳場上のソラ窓（天窓）】

帳場天井の1間×1間半の吹き抜けから屋根の半間四方のソラ窓の光が差している。電燈が普及する前の町屋で一般的。



左側：七宝紋様（輪違い） ○を四方に繋げる が訛って七宝紋様になった。輪が幸福・円満を象徴している。  
右側：鱗紋 蛇の鱗をシンボル化した△を組み合わせた鱗紋は、女性の厄除けや再生の意味を持つ



左側：蝙蝠（こうもり）紋 中国語の蝙蝠は<幸福>と同じく「ビエンフー」と発音し、幸福を象徴した紋様  
右側：瓢箪紋 鈴生りの瓢箪は無病息災・子孫繁栄や厄除などの意味を持つ。襖の引手にも使われている



遊客帳には、月日に加えて、客の容貌や服装や接客した娼妓を記録し、警察が確認の印を押した

建物名称	新むつ旅館
建築年	1899年（明治32年）
構造・様式	木造在来構法 二階建 ソラ窓付切妻屋根
所在地	青森県八戸市小中野6丁目20番18号
電話	0178-22-1736
H P	---
開館時間	10：00～16：00（予め電話で相談）
アクセス	J R八戸線小中野駅より徒歩約10分
備考	国登録有形文化財





## 見どころ

### 【中町伝建群保存地区】

雪深い津軽の街は落し板に明り障子を嵌めたコミセが生活を庇護している。

### 【コミセ】

各町屋のコミセはよく見ると少しずつ異なるのは、私用のコミセを共用するためである。

### 【外観】

家作規制のために低い棟高の切妻屋根・妻入町屋で、豪雪時はコミセ屋根から出入りした。

### 【ツキミノマから愛でる仲秋の名月】

通り土間脇のツキミノマからカクレ部屋越しに名月を楽しめる。

### 【通り土間の喫茶コーナー】

2間幅の通り土間を活かした喫茶コーナーは新たな住まい方を提案している。



上：カクレ部屋  
通りから見えるコミセ上のガラス窓はカクレ部屋の黒石藩の家作規制により低く抑えた棟高に併せて登り梁とした天井の低い2階

左：ツキミノマから  
愛でる仲秋の名月  
通り土間脇のツキミノマの囲炉裏からカクレ部屋のモンドリアン風組子の障子及びガラス窓を開け、仲秋の名月を愛でる

代々「理右衛門」を名乗る黒石藩御用達の米問屋であった高橋家の住宅は、1751～1763年（宝暦～明和初期）に建てられた。1766年（明和3年）1月28日の豪雪時の大地震に耐えて以後、通り土間と水廻りを改造しただけでほぼ当初の様子を伝えている切妻屋根・妻入のコミセ付大型町屋である。江戸時代中頃の津軽の町屋である高橋家住宅は、1973年（昭和48年）に国の重要文化財に指定され、2004年（平成16年）に屋敷内の蔵も追加指定された。



明り障子と板戸で雪を防ぐコミセ

津軽のコミセは、北陸の雁木と異なり、雪を防ぐ障子と板戸を立てる。



通り土間を活かした喫茶コーナー

幅2間の通り土間を活かし、新たな生活空間として喫茶コーナーを設置している。

建物名称	高橋家住宅
建築年	1751～1763年（宝暦～明和初期）
構造・様式	木造在来構法 妻入屋根一部二階建住宅
所在地	青森県黒石市中町三八番地
電話	0172-52-5374
H P	---
開館時間	9：00～17：00（不定休）
アクセス	弘南鉄道黒石駅から徒歩約8分
備考	国指定重要文化財





## 見どころ

### 【暗い冬と対峙する外観】

暗く吹雪が続く津軽の冬に存在感を示す「赤い屋根と煉瓦塀」の外観。

### 【明るさを求めた内部空間】

雪が積もった住居の内部は、カッチョと呼ぶ雪囲いで覆われた暗い空間となる。堀江佐吉は「サマ(高窓)とガラス窓」を多用して明るい冬の暮らしを実現した。

### 【建てぐるみの付属屋】

豪雪と地吹雪の津軽平野では、主屋と付属屋を繋いだ建てぐるみとする。

### 【洋小屋組】

外観は和風の入母屋屋根であるが、台所上はトラス構造の洋小屋組である。



### 【通り土間脇の二階の応接室】

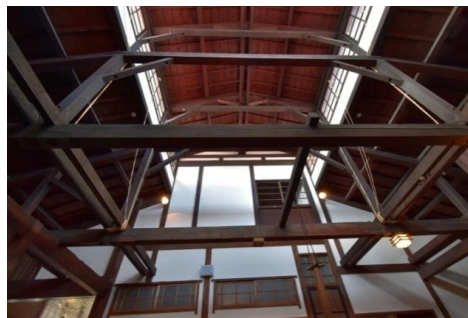
二階への折り返し階段を上ると札幌や函館の洋館に学んだ洋風の応接室と家具が残されている。



### 【通り土間脇の続き間】

玄関を入ると、広い通り土間が裏まで続いている。その傍に伝統的な炉付きの続き間が連なっている。

暗く低い雲が垂れ込め、地吹雪が続く冬の津軽平野のほぼ真ん中の金木町（現五所川原市金木町）に衆議院議員であった太宰治の父 津島源右衛門が青森県の近代洋風建築を担った堀江佐吉に依頼して1907年（明治40年）に建てた煉瓦塀に囲まれた入母屋屋根・木造2階建の和洋折衷様式の住宅である。外観は和風であるが、主構造は木造トラスの洋小屋組である。平成16年3月14日の豪雪で煉瓦塀が破損したが、修復して現在に至る。1950年（昭和25年）に住宅から太宰治文学記念館併設旅館に変わり、1998年（平成10年）から太宰治記念館として公開されている。津軽の近代化を象徴する住宅として、2004年（平成16年）に重要文化財に指定された。



板の間上の洋小屋組

通り土間を突き当たった左手に大釜と自在鉤を吊した囲炉裏がある。

その上は頬杖にトラスを組み合わせた洋小屋組で、棟両側の高窓から、冬でも明るい光が射し込んでくる。



中ノ蔵や米蔵を下屋で一体化

通り土間を抜けると中ノ蔵と米蔵手前に2間から3間幅の下屋を掛けて屋内化した作業空間がある。

下屋はガラス戸で外と仕切られているので、冬でも雪に悩まされずに作業ができる。

建物名称	太宰治記念館 斜陽館
建築年	1907年（明治40年）
構造・様式	木造トラス構造二階建 和洋折衷様式
所在地	青森県五所川原市金木町朝日山412-1
電話	0173-53-2020
H P	<a href="http://dazai.or.jp/">http://dazai.or.jp/</a>
開館時間	5月1日～10月31日 8:30～18:00 11月1日～4月30日 9:00～17:00
アクセス	津軽鉄道金木駅から徒歩7分
備考	国指定重要文化財





岩手県軽米町出身の田中家の曾祖父が1896年（明治29年）に建てた消防屯所を摸した洋風望楼付入母屋屋根の木造二階建住宅である。戦前は軍馬100頭余りを飼育する山林持ちの豪農であったが、戦後1952年（昭和27年）頃には馬が2-3頭までに減り、かつての外厩は車庫として使われている。1957年（昭和32年）の大火はすぐ脇の堰まで迫ったが、なんとか類焼を免れた。その後の生活の近代化に伴い、1982年（昭和57年）から1年掛けて土間やダイドコ（広間）を伝統的意匠を継承した居間とDKに、元土間上を二階に改修した。青森県南地域の豪農の生活を伝える住宅として2007年（平成19年）に登録有形文化財（建造物）に指定され、現在に至っている。

## 見どころ

### 【屋敷遠望】

約3000坪の屋敷の道路側に棟門と板塀を構え、屋敷林の間に洋風望楼を遠望できる。

### 【外観】

格式を感じる表玄関と見上げる洋風望楼、生活を表出した裏側の格子窓の外観が特長である。

### 【庭】

オンコ（一位）に赤松やヒバ、ツツジやコブシ等に苔を配した庭園は癒やし空間そのものである。

### 【表空間】

表側はジョイからオクザシキまで続き間があり、庭の眺めは深い森に包まれた間隔を与える。

### 【生活空間】

ダイドコ（広間）と土間を伝統意匠を活かしたDKと居間に改造し、生活を豊かにしている



24畳のジョイからオクザシキまで奥行3間に間口13間の広い続き間は、イベントや展示会に使用されている。



ダイドコ（広間）とドマ廻りは、現在の生活に合わせた当初の意匠を活かした居間とDKに改造されている。

### 【表側外観】



棟門からツツジの間を右折すると、格式を感じさせる「マツカワビシ」の棟飾りを設えた玄関があり、見上げると洋風望楼が地方の近代化を感じさせる。左手の塀重門奥はザシキ庭園に続く。

### 【吊り上げ大戸の勝手口】



生活の現代化に伴って、1977-1978年（昭和57年-58年）の1年掛けてダイドコ（広間）と土間を改造したが、当初の吊り上げ大戸を残して豊かな軒下空間を設けている。

### 【広縁からの庭の眺め】



鍵の手状のザシキに沿った広縁からオンコ（一位）や赤松、ヒバを背景に苔やツツジを配した庭は、静肅な冥想へ誘ってくれる。庭に下りて、散策し始めると深いしじまが迫ってくる。

建物名称	田中家住宅
建築年	1896年（明治29年）
構造・様式	木造在来構法 望楼付一部二階建住宅
所在地	青森県三戸郡南部町大字福田字間ノ原5-1
電話	0178-84-2520
H P	---
開館時間	原則非公開（見学希望の場合、電話で相談）
アクセス	青い森鉄道苦米地駅から徒歩20分
備考	国登録有形文化財



# 茶寮かだん（旧橋本家別邸）

岩手県花巻市

さりょうかだん（きゅうはしもとけべってい）



建物外観

旧橋本家別邸は、童話作家・詩人の宮沢賢治（1896～1933年）のまたいここで呉服店を営んでいた当主が妻の療養のために建築した。花巻市役所交差点近くの路地、通称「ひゃっこ坂」を下ったところに歴史を感じる石垣と土壁の塀が見えてくる。別邸は昭和初期に建築された和洋室のある豪華な木造平屋の建築物だ。敷地内には、賢治が晩年に設計した花壇が復元され四季折々のお花を楽しむことができる。



正門外観

## 見どころ

洋間の1角は両壁をわざわざ狭くして出窓のようにしている。額縁に見立て窓の向こう側の庭を絵画のように見せる意図があったのでは。

床の間の造作の職人技は見応えがある。床柱の側面は1本のようなが、小口を見ると寄木になっている。

年月が経っても隙間が見られないし上部も同じ作り。長押など目に見えないところも埋木をされていて埃のたまり難い納まりとなっている。浴室入口の引き戸の敷居は金物ではなく、1本の木をレール状に加工したもの、細かい技なのに今でも歪んでいない。裏側の天井のコーナーも扇状に張られていたり、トイレのタイルの役物も凝ったデザインとなっている。建具の模様などは部屋ごとに違い、微妙な湾曲など細かい職人技がみられる。



## 【喫茶店内】

間取りは建築当時のまま、玄関入って左側に洋室、建物南側には縁側と10畳・6畳の続き和室がある。縁側の奥の3畳の個室は南面で日当たりのよい場所である。縁側からは自慢の花壇が眺められる一面ガラス戸で当時のゆがみ硝子をそのまま利用、現在の喫茶店では低めのテーブルとチェアを置き珈琲を飲みながらくつろげるようにしている。10畳の和室には立派な床の間がある。床柱・書院なども手の込んだ造作で建築に3年かけたと言われているだけの大工の技がみられる。また天井板には古代杉、屋根瓦も大坂で特別に作らせるなど全国から質の高い建材を取り寄せて随所に使われている。縁側奥の個室の型ガラスの模様がまた美しく、老朽化で割れたものなどは復元工事のときに邸内の同じ模様のガラスをこの部屋に集めて再現している。

当時の所有者、橋本家は天津屋という呉服店を営んでいた大きな商家。別邸の南側から上町商店街までの敷地は天津屋呉服店の敷地で別邸はその少し高台の見晴らしのいい場所に建っている。賢治が設計した花壇は、敷地の南斜面に位置し、南北約9m、東西約4m、高低差約1.1mのスペースに楕円や四角など幾何学模様がデザインされている。その模様がどれ一つとして同じ形をしていないのが特徴だ。



建物名称	茶寮かだん（旧橋本家別邸）
建築年	1927年（昭和2年）
構造・様式	木造平屋建
所在地	岩手県花巻市花城町11-12
電話	080-2823-1048
H P	<a href="http://kadan.on.omisenomikata.jp/">http://kadan.on.omisenomikata.jp/</a>
営業時間	10:00～18:00（定休日 木曜日）
アクセス	東北本線花巻駅よりタクシーで5分 東北自動車道花巻南ICより車で10分 パークアベニュー花巻駐車場(有料)をご利用ください
備考	



# 大慈清水 お休み処

岩手県盛岡市

だいじしみず おやすみどころ



外観

この町家は1898年（明治30年）頃に、八百屋「八百勘」の大澤家町家として建築された。木で木を組む木組みの伝統工法で地震等に対して金物で固める剛的構造と違って、木組みの復元力で柔軟に対応する工法である。

昭和の初めに、大掛かりな改造をして、前2階を座敷にし、吹き抜け奥に2階を増築した。戦後は、借家として、診療所、電器店の店と住まいに利用されてきましたが、空家となり、解体して駐車場化される可能性があった。

お休み処は特定非営利活動法人盛岡まち並み塾で、お借りし空家町家の再生第一号として取り組んだ施設である。

平成19年9月に地域の活動拠点、実物の町家見学、体験施設として開設された。

また、この界隈には鉾屋町に生活用水として今も使われている青龍水と大慈清水、2つの井戸があり、豊富な湧き水で酒造、豆腐、ところてん等の業種も生んだ。

毎月第2土曜日には盛岡町家の開放イベントも行われ、特に盛岡de手作り市『てどらんご』は若者で賑わっている。

## 見どころ

盛岡の町家は、町人の職住一体型の住まいとして成立してきた。密集して住まう住居形態で現代的に表現するなら「横に連なる集合住宅」といえる。盛岡市鉾屋町にあるお休み処では、外部の狭い間口からの想像を超え、高く清々しい空間を堪能できる。中の間を家長の仕事の場、家の中心として常居（じょい）と呼び、2階が載らない吹抜けとし、この部屋に大きな神棚がありとても魅力的な空間である。主人を足下にしない、出世を妨げないと言われ、神棚の位置が家の間取りを決めていることから神のいる町家と呼ばれている。

外観は下屋付きで、道路と平行に屋根の棟を持つ平入り（ひらいり）である。この下屋は、青森県、秋田県境北部にみられるこみせ木造りアーケードが変化し、それぞれの家専用のうち土間に変わったものである。窓には細い縦格子を配し地味で落ち着いた姿である。



内観



神棚



夜景

建物名称	大慈清水 お休み処
建築年	1902年（明治34年）
構造・様式	木造亜鉛めっき鋼板葺二階建
所在地	盛岡市鉾屋町3-15
電話	019-622-8989 (特定非営利活動法人盛岡まち並み塾)
H P	<a href="http://machijuku.org/">http://machijuku.org/</a>
開館時間	10:00~16:00（水曜日定休）
アクセス	バス盛岡駅東口13・14番線乗り場 「矢巾営業所」「日詰駅」行
備考	





南部家44代当主南部利英氏が1953年（昭和28）に建築。昭和30年に南部家別邸（現在は盛岡市中央公民館）が盛岡市に売却されることになり、その代わりとして、その前の昭和28年に建築された。南部家は東京に居住していたが、来盛時に滞在するための邸宅が必要であった。施工は鹿島建設株（初代社長・鹿島精一は盛岡市出身）、設計者は不明である。



1953年（昭和28年）竣工時 離れが繋がっていた

## 見どころ

季節の花に迎えられ、和の趣きのある玄関は引き戸ではなく開き戸。うっかり引いてしまう。玄関で靴を脱ぎ広間へ。程よい高さの勾配天井と漆喰壁、すっきりとしたコンクリート打ち放しの暖炉、長い年月を経て磨かれた板の間に障子が映える。暖炉の壁面線は壁に対し、わずかに斜めで圧迫感を感じない。建具は外の景色を邪魔しないシンプルなデザインで、障子の棧は手前が細く奥が太く、台形状になっている。

広間の奥には一段上がって和室があり、間仕切りの引込み戸を閉めれば茶室としても使える。また、コンサートなどの舞台にもなる。季節ごとの床の間の掛け軸や飾り棚の設えを楽しむことができる。

4尺ほどの深い軒の出は、夏には日射を遮り、冬には暖かい日差しを導き、梅雨時は窓を開けて通風を得ることができる。外観は軒の水平線が美しく、建物に奥行きを与えている。

現在はオーナー夫妻が「ゆったりと流れる時（time）と心を解き放てる空間（space）」を提供しながら、珈琲・お茶を楽しむことができる場所になっている。



時代の変化を受けて、南部家はこの住宅を売却することになり、現在の所有者の親族が1963年（昭和38年）に購入したものの、平成21年まで使用することなく雨戸も閉めたままとなっていた。46年後の平成22年にこのタイムカプセルを開けたところ、屋内の保存状態はとても良く、また屋外も軒の出が大きいので建具やガラスの状態も良好であった。1953年（昭和28年）当時の姿に戻すこと、何も造り変えないこととし、傷んだところのみ修繕する工事を行い建物が蘇った。天井の漆喰、壁板、柱、床板、木製建具・ガラス、戸棚、暖炉等々のものが全く手つかずで現存している。

翌年23年3月11日の大震災では若干漆喰壁に亀裂が生じたが、大きなダメージは無かった。



コンクリート打ち放しの暖炉と障子が映える板張りの広間

建物名称	time&space 愛宕下
建築年	1953年（昭和28年）
構造・様式	木造平屋建
所在地	盛岡市愛宕町23-49
電話	019-651-8050
H P	<a href="http://www.atagoshita.jp">http://www.atagoshita.jp</a>
営業時間	11:00~18:00 定休日：木曜・金曜（原則）
アクセス	盛岡グランドホテル 西側下
備考	12月末から3月中旬まで冬眠





鍾景閣表門と脇玄関

旧伊達邸は、明治38年に第十五代当主邦宗が邸宅として、仙台市一本杉に建造したものである。旧大名層の屋敷の系譜を有する明治時代の華族邸宅の典型で、意匠的にも優れた建造物である。また、内向の諸施設をも配した、華族の生活資料としての位置も高い。旧伊達邸は、昭和55年聖ウルスラ学院から仙台市が寄付を受け、昭和60年10月、現在地に復元したもので、邸宅に保存されていた第五代藩主吉村公の扁額に由来し、「鍾景閣」と命名され、仙台市指定有形文化財に指定されている。



## 見どころ

表玄関、脇玄関、広間（待待）、二重天井の大書院、武者隠しのある小書院（客座敷）、居間書院、奥座敷、他女中部屋、台所、浴室、便所なども大名屋敷の原型をとどめており、華族の生活をうかがわせている。表玄関の屋根は瓦葺き入母屋作り破風、脇玄関は切妻造り起り破風となっている。両玄関とも銅板葺きの屋根庇が二重に設けられている。大玄関の軒裏には柱の頭部に実肘木と大斗など複雑な料椽が用いられている。床の間の天井板に、ケヤキの一枚板、ヒノキの二列の竿縁天井、珍しいトチの板など部屋の格式ごとに違えてある。上質の材料が使われ、随所に大工の気概を感じさせる丁寧な造りとなっていることを肌で感じることができる。

設計は、当時宮城県で活躍した第一級の建築士、山添喜三郎であることがわかっている。山添はオーストリア万博に大工棟梁として招かれるほどの腕のいい大工で、仕事には極めて忠実で施工や材料にもずいぶん厳しく次のようなエピソードが語り伝えられている。瓦は一枚一枚重量を測り、一定以上の瓦は容赦なくはね材とし、材木も検査が厳重ではね材が多く出されたため、納入業者は次々と倒産したといわれている。



仙台藩祖、伊達政宗公は、料理に対して、強いこだわりを持っていた人だったと言われており、「少しも料理心なきはつたなき心なり」（少しも料理の心得がない者は貧しき心の持ち主だ）という言葉が、政宗公の言動を書き記した『政宗公御名語集』に残されている。鍾景閣は現在、レストランとして、一般に開放されていて趣きのある仙台筆筥に会席料理を納めた筆筥料理やお食事膳をいただくことができ、建物や器の美しさを五感で楽しみながら鍾景閣を堪能することができる。

建物名称	鍾景閣
建築年	1905年（明治38年）
構造・様式	木造平屋建て一部二階 書院造
所在地	仙台市太白区茂庭人來田西143-3
電話	022-245-6665 (株)金魂グループ
H P	<a href="https://shoukeikaku.jp/">https://shoukeikaku.jp/</a>
開館時間	11:30~15:00 17:00~20:00
アクセス	宮城交通バス「秋保温泉行」「二口温泉行」 「茂庭台団地行」「茂庭荘入口」徒歩15分
備考	仙台市指定文化財



# 時音の宿 湯主一條 木造本館

宮城県白石市

ときねのやど ゆめしいちじょう もくぞうほんかん



木造本館 全景

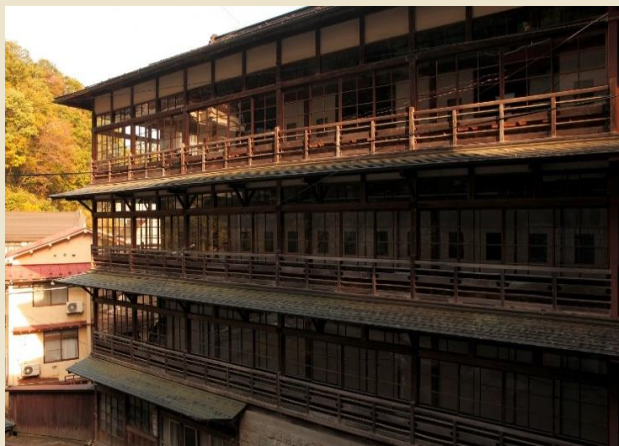
鎌先温泉郷は、古くから交通の要所である、宮城県最南端の白石にあり、1428年頃に開湯されたと言われ、伊達政宗や白石城主片倉景綱（小十郎）も入湯したと言われている。その中の一番奥に立地し、一番古い歴史を持つのが湯主一條である。急峻な土地を徐々に切り開いて建物を増築していった経緯があり、巧みな配置計画が美しい景観をつくりだしている。



木造本館を坂から見る

## 見どころ

木造本館は湯主一條の建物群の中で一番手前に位置しており、温泉街の細い坂をあがった先に、木造4階の建物がそびえるように現れる。その姿は圧倒的であるが、外部がすべて木製ガラス建具であるため、軽やかさも感じる。木造本館の先には同じ形態の湯向棟・事務所棟、その左手に客室棟と続く。一步踏み出すごとに、表情をかえる景観は一瞬にして、昭和初期へタイムスリップする感覚を味わうことができる。かつて湯治用の客室であった木造本館は現在、宿泊客の食事の場として使用されている。山あいの深遠な景観は夕暮れには、木造本館・湯向棟に灯る照明で、幻想的な雰囲気包まれていく。最後は座してゆっくりと空間を堪能することをおすすめしたい。



## 【木造本館】

外周部四面に回廊、西面に8畳4間と6畳1間、東面に6畳4間と4.5畳1間が横並びとなり、各々1間の床の間と飾り棚を背にして配置されており、1階から3階まで同様の平面となっている。東日本大震災時、木造本館は外周部の木製建具が1枚外れたのみで被害は全くなかったという。外周部はすべて開口だが、内部の間仕切り壁が背骨のような役割をし、地震力に耐えたのでは、と推察されるが、建設に携わった棟梁の技術によるところも大きいと思われる。木造本館の工事は塩谷藤吉氏が請け負い、気仙大工の手伝いも頼んだと言う。木材は一條家が所有する山から切り出した100年生の杉を使用し、伐採・製材開始から落成まで約2年半の年月を要した。当時の通路は石段であったため、材料の運搬もすべて人力だった。建前時には人足の数は300人にもなり、1週間ほど続いたという。また、当時は統制の時代で、釘・金物の入手には困難を極めたため、継手や仕口には金物を使用せずに木を組み上げ、また柱も主要柱61本中33本を33尺長さの通し柱とするという木工事を行ったという。創建当時の姿を維持していて、建築好きにはたまらない見どころが多く、大正・昭和期の大工技術が最も高かったと言われる時代の技術を感じることができる建物である。

建物名称	時音の宿 湯主一條 木造本館
建築年	1941年(昭和16年)
構造・様式	木造三階(一部四階)建
所在地	宮城県白石市福岡蔵本字鎌先1-48
電話	0224-26-2151
H P	<a href="http://www.ichijoh.co.jp/">http://www.ichijoh.co.jp/</a>
開館時間	一般公開はしていないが、宿泊者は見学可能
アクセス	東北新幹線白石蔵王駅よりタクシーで15分 東北自動車道白石ICより車で20分
備考	湯向棟、土蔵とともに国登録有形文化財





緑水庵

良覚院丁公園の良覚院とは、京都聖護院（天台修験）の末寺で修験寺のことであり、伊達の祖・伊達朝宗（1199年没）に仕えた日林という修験者が、良覚院の始祖である。代々伊達家に伝え、伊達政宗が岩出山から仙台に居城を移した1602年（慶長7年）に従ってきてこの地を賜り、修験寺が建てられたと言われている。藩政時代には、政治、軍事、事変、日常の吉兆運勢について祈祷を行い、伊達家の信頼も厚く一門格の待遇を与えられ威勢をふるっていたという。明治に入り伊達家からの保護が無くなって、廃寺となり、広大な土地のほとんどは、民有地になり、庭も錆びれたが、明治中期頃、5年がかりで改修された。今茶室として使われている建物は1899年（明治32年）に建てられた。うっそうとした樹々に囲まれていたため昭和20年の空襲を免れて残った。戦後の復興事業により庭園が分断される形で区画街路計画が持ち上がった時、市民の間からこの庭を残してほしい旨の申し入れがあり、計画は変更され、公園として残される事となった。昭和35年、庭園に残る建物は仙台市に寄贈され「緑水庵」と名付けられた。築約120年を経ているが、傷んだ所はその都度、改修、補修されており、建物の状態はとても良い。

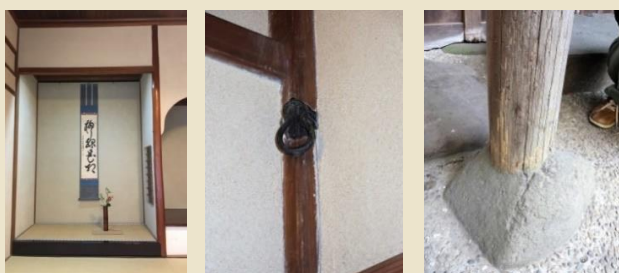
現在は月に2回、一般公開され、庭園を眺めながらお茶を頂ける。他の日は予約を入れて、利用する事もできる。

## 見どころ

緑水庵がある、良覚院公園は仙台駅から約1.2kmの市の中心街に位置し、周囲は高層マンションや事務所ビルに囲まれ、近くには仙台高等裁判所、地方裁判所、仙台高等検察庁など官公署のある地域内にあるが、細い路地から門を一歩入ると、高い木立に囲まれた庭園内は濃い緑に覆われて、都市の喧騒から解放され、静寂な空間を感じさせる。庭を管理されている方が、苔が少なくなったと嘆いていたが、周囲の高層の建物の中から漏れる太陽の光も少なくなってきているせいかもしれない。緑水庵は、茶事を目的として使われており、和室（8畳、6畳、3畳）水場、管理室、便所（身障者用含）準備室などの規模である。特に和室8畳から障子を開けて眺める庭園は美しい。濡れ縁の下屋の桁の丸太組、柱は土台を両側から差し込む「柱勝ち」で納め、木材の小口を見せない構造、障子の突合せ部、蚊帳の吊金具などの何気ないディテールに先人の知恵を感じて懐かしく、落ち着く。



庭にはアカマツ、イチヨウ、モミジ、ツツジ、シラカシ、サルスベリ、サングジュなどの樹々が茂り、茶室に一層、趣を加えている。特に6月の梅雨時には苔が十分に水を含んで緑のじゅうたんを敷き詰めたようになり、木立の緑と相まって光も緑色に光って見える。



庭から見た緑水庵

緑水庵

建物名称	良覚院丁公園と緑水庵
建築年	1899年（明治32年）
構造・様式	木造平屋建 数寄屋造
所在地	仙台市青葉区片平1-2-5
電話	022-225-3860
H P	<a href="http://www.city.sendai.jp/aoba-koen-somu/aobaku/koen/ryokusuiian.html">http://www.city.sendai.jp/aoba-koen-somu/aobaku/koen/ryokusuiian.html</a>
開館時間	毎月2回公開日 9:00~16:00
アクセス	市営地下鉄東西線 大町西公園駅下車3分
備考	





# 大館市立鳥潟会館（旧鳥潟家住宅・庭園）

秋田県大館市

おおだてしりつ とりがたかいかん（きゅうとりがたじゅうたく・ていえん）



表門

## 見どころ

主屋は1760年代初めの建築、1936年（昭和11年）に曳家・増改築した建物である。旧屋部は江戸期の、増改築部は京風数寄屋造りとなっている。

また、増改築時に庭園の拡張を行っており、京都から1000人を超える大工・左官・造園師を招き、5年の歳月をかけて完成させたといわれている。随所に珍しい材料や趣向が凝らされており、秋田の奥地にありながら、京都風の侘び寂びを感じられる総合的な空間となっている。

場所により全く違う意匠・雰囲気を持っており、多くの使用人・職人が宿泊した裏の領域も圧巻である。どれだけ多くの感動を見つけられるかもひとつの楽しみ方である。



中門



台所

鳥潟家は慶長年間のころから続く旧家で、花岡の肝煎を代々務めてきた家柄であった。花岡といえば鉢山で大変栄えた町だった。

第17代の鳥潟隆三博士は、1936年（昭和11年）に京風の意匠を取り入れ、邸宅の増改築と庭園の拡張を行った。庭造りには京都から造園師を招き、庭石に京都の鞍馬石を使うなど、京風の情緒豊かな庭園として、建物と共に東北地方有数の文化遺産といわれている。

2011年（平成23年）3月22日、建造物が秋田県指定文化財に、庭園が秋田県指定名勝（記念物）に指定されている。



主人室から眺める庭園



茶室と離れ



母屋

建物名称	大館市立鳥潟会館（旧鳥潟家住宅・庭園）
建築年	1760年代初め（1936年（昭和11年）移転・増築）
構造・様式	木造二階建 数寄屋造
所在地	秋田県大館市花岡町字根井下156番地
電話	0186-46-1009
H P	<a href="http://odate-city.jp/museum/torigata">http://odate-city.jp/museum/torigata</a>
開館時間	9：00～17：00（11～3月は16：00終了）休館日有
アクセス	秋北バス 鳥潟会館前/花岡本郷 下車 駐車場有（大型可）
備考	建物：秋田県指定文化財 庭園：秋田県指定名勝



# 旧秋田藩主佐竹氏別邸（如斯亭）庭園

秋田県秋田市

きゅうあきたはんしゅさたけしべつてい（じょしてい）ていえん



如斯亭庭園は、元禄年間に3代藩主佐竹義処が近臣の大嶋小助に土地を与えて、建てた別荘がその起源であり、佐竹氏居城の久保田城搦手（裏門側）にあたり、遠く太平山系を望む景勝地に営まれました。

寛保元年（1741）には五代藩主義峯に献上され、儉約の旨により一時衰亡しましたが、8代藩主義敦が安永4年（1775）に再興しました。



## 見どころ

流れは園内北東部の築山の峡谷から発し、中島を配した園地を経て清音亭の露地に至ります。絶え間ない水流は、見る人に由来となった光景を思わせる構成となっています。園内の見所である「園内十五景」は紅霞洞、靄然軒、夕陽坡、観耕台、清風嶺、佩玉砦、仁源泉、超雪谿、玉鑑池、弓字径、湯虎石、巨龍嶋、星槎橋、幽琴澗、清音亭からなり、庭園の遠路を回遊することで、それらの奇岩の景石や灯籠、四季折々の植栽など様々な風景を楽しむことができます。

この庭園は回遊式庭園であるほか、園から北西の山を望む借景式庭園、主屋から見る鑑賞式庭園としての要素をもつ庭園でもあります。

市指定名勝千秋公園（秋田市）や国指定名勝旧池田氏庭園（大仙市）の設計に関わった、近代庭園の祖といわれる長岡安平は、如斯亭庭園を「寛政頃完成し東山時代の構を伝えたとされる東北では無二の名園」と絶賛したと伝えられています。

旧秋田藩主佐竹氏のものとして現存する唯一の庭園で、東北地方の大名庭園や庭園文化を知る上でも重要な文化遺産です。



9代藩主義和によって庭園が本格的に整備され、秋田藩校明德館の助教幹事であった儒者那珂通博に「園内十五景」を選定させました。そして名を「如斯亭」に改め、藩主の御休所にとどまらず、藩内外の多くの文人墨客の交遊の場ともなり、佐竹氏の文化の表徴として多くの詩歌書画にうたわれるようになりました。

9代藩主義和が名付けた「如斯亭」の由来は、孔子の論語「逝者如斯夫、不舍昼夜（逝くものは斯くの如きか、昼夜をおかず）」からとったもので、水流の絶え間なき流れを嘆賞しつつ、人間のみちも学問もまたかくあるべきという意味といわれています。



平成19年（2007）に国の名勝に指定され、平成26年（2014）から修復整備を行い、往時の姿に蘇った如斯亭庭園は、平成29年（2017）10月に秋田市の新たな名所として開園しました。

建物名称	旧秋田藩主佐竹氏別邸（如斯亭）庭園
建築年	寛政の頃
構造・様式	木造平屋建
所在地	秋田市旭川南町2番73号
電話	018-834-6300
HP	
開館時間	午前9時～午後4時30分（4月～11月） 午前9時30分～午後4時（12月～3月）
アクセス	【バス】秋田駅から約10分 「秋田温泉線」もしくは「仁別リゾート公園線」でバス停「からみでん」下車。徒歩5分 【自動車】秋田中央ICもしくは秋田北ICから車で約15分
備考	





# 旧佐藤政忠家住宅

秋田県由利本荘市

きゅうさとうまさただけじゅうたく



西側通り 座敷部

## 見どころ

座敷の天井高が2100mm程度と低く、畳の上にそのまま座ると落ち着く空間になっている。そして、この和室ならではの簡素で融通性のある空間に身を置くと、当時の清廉潔白な日本の美意識とゆっくりとした時の流れを感じることができる。



秋田県の南部、江戸時代、讃岐より入部した生駒氏が治めた矢島藩（由利本荘市矢島町）に『旧佐藤政忠家住宅』はある。1868年（明治元年）の戊辰戦争により多くの城下の建物は焼失。翌1869年（明治2年）に江戸家老であった加川退蔵の住宅として建てられた。当時の加川家住宅は、八森陣屋の近くにありましたが、1873年（明治5年）に加川家が東京へ転任するにあたり、佐藤政忠が所有。その後現在の地へ移転された。本住宅は当時の江戸大工の手によるものとされていて、武家住宅の様子をよく伝えている。



南側通り 正面

建物は145.634㎡、矩折の木造平屋建。西側通りの桁行7.5間は座敷部、南側通りの桁行4間は台所部になっている。屋根は緩い勾配の銅版葺切妻屋根。西側の壁面には繊細な格子を組んだ板屋根の出窓を設けて、東側の縁側からは風情のある庭を眺めることができる。玄関を入ると、畳敷きの取次、供部屋、8畳の茶の間、6畳の中座敷、6畳の奥座敷、縁側の座敷部。台所部は玄関すぐ隣にある勝手口（土間）、台所、水屋と縁側を通過して奥座敷まで移動できる。ハレ（特別な時）の間・ケ（普段の生活）の間とを区別できる間取りになっている。内観、外観とも簡潔につくられています。出窓の繊細な格子や茶の間の造り付けの神棚・仏間など目を惹く。

取次 供部屋



建物名称	旧佐藤政忠家住宅
建築年	1869年（明治2年）
構造・様式	木造平屋建
所在地	秋田県由利本荘市矢島町矢島32
開館時間	9：00～16：30 ※事前申込みが必要
利用申込み	由利本荘市教育委員会 矢島教育学習課（日新館） 0184-56-2203
アクセス	由利高原鉄道鳥海山ろく線矢島駅より徒歩15分 羽後交通バス矢島総合支所前徒歩0分
備考	





大戸

冬の茅葺住宅に明かりがともる。今はほとんど目にするここのない景色が、ここにはある。まるでタイムスリップしたかのように暖かくそして懐かしい暮らしの風景。

高齢化率日本一の秋田県の中央、人口約9,000人の秋田杉に囲まれた集落に、築135年の茅葺古民家がある。東北地方の日本海側に多く見られる中門造りの農家建築で、土間内部の床上部分にイナベヤ（稲部屋）という稲収納場を設けているのが特徴のひとつである。ニワは、収穫された農作物のほか季節の山菜などの加工・保存等の作業場であった。



ニワ

## 見どころ

里帰りの村民（会員）が古民家維持のために、自分のスキルを提供する「助太刀」で、家守や地域住民と共に掃除・手入れが行なわれている。夏には茅葺屋根の葺き替え作業まで協力してくれる。三和土（玄関）と土間に囲まれた茶間と、その奥の間とつながる畳の間は、村民たちが集い囲炉裏で鍋を囲む交流の場として今も活かしている。



縁側



客間



書斎

## 【古民家から始まる新しい田舎】

この茅葺古民家を取り壊しの寸前に、「家を一人で維持することの困難」な家主の厳しい現実を聞いた一人の若者が、家の維持費をみんなで分け合う「シェアビレッジ」という仕組みを思いついた。この家を一戸の古民家として文化的に保存をするのではなく、新たな「村」をつくるためのシンボル（拠点）として蘇らせた。この「シェアビレッジ町村」は秋田県の農家民宿として登録されており、年貢（年会費）を納めれば誰でも村民となれて里帰り（宿泊）ができる。玄関を入り左側には一際目を引く広い土間があり、子供のころ夏休みに遊びに行った祖父の家を思い出させる。宿泊専用の和室は、質素で優美かつ落ち着いた空間で、過去の家主が丁寧に守り続けてきた証である。ここを地元のおじいさんやおばあさんが土間に座り、都市から来た若者たちと談笑している風景を理想としている。その風景そのものが”村”であり、いろいろな人がまざり助け合い”村”のように維持していく。

## 【第二の故郷へ”憧れの里帰り”】

この民宿は、100年以上も昔の先祖たちが過ごした空間で宿泊し、郷土料理を楽しみ、里山サイクリングで山々を駆け巡り、里山での暮らしを体験することができる。単なる見学ではなく、この先100年住み継げることを目的に活動している若者たちと、地域住民が、農業文化を通して、人も里も共に生きる方法で新たな地域、暮らしのスタイルを創造し再び歴史を刻み始めた。そして今、高齢化が進む過疎の村に子供たちの笑い声が聞こえ始めている。



三和土（玄関）

建物名称	シェアビレッジ町村
建築年	1878年（明治11年）頃
構造・様式	木造平屋建 中門造 曲家 農家民宿 全9部屋（うち2部屋は宿泊専用）
所在地	秋田県南秋田郡五城目町馬場目字町村49
H P	<a href="http://sharevillage.jp/machimura">http://sharevillage.jp/machimura</a>
開館時間	10：00～15：00（火、木、祝日定休 土日営業） 問合せ：事前HPcontactより専用メールフォーム
アクセス	JR八郎潟駅より車で約20分（10km） 秋田空港より車で約50分（50km 高速道路経由）
備考	運営（農家民宿部分）：大潟村松橋ファーム





旧青山本邸は、1890年（明治23年）に竣工され、後に【漁業王】と称される【青山留吉】が漁業で成した財で故郷に建てた邸宅である。建設当時は茅葺きや石置き杉皮葺の屋根が主流の漁村集落に、雄大な瓦葺きの大屋根は、まさに『故郷に錦を飾る』を建築によって表現したものと言えよう。山形県遊佐町の貧しい漁家に生まれた青山留吉は1859年（安政6年）単身北海道の漁場に渡り、明治期の積丹半島を中心に漁場を次々と拡大し、漁場15ヶ統余、漁船130隻、使用人300人余を擁する道内有数の漁業家となった。漁業一筋48年、明治41年73歳で北海道の漁場を養子の政吉に譲り、ここ青塚に隠居した。一時は村税の8割を収めるほどの大地主となり、北海道小樽には【旧青山別邸】が建てられている。



## 見どころ

酒田市から国道7号線を北へ20分、《旧青山本邸》の大きな看板の建つ交差点を左折し海岸の方へと向かうと一際大きなお屋敷が現れる。現在は駐車場等の周辺施設も整備され、遊佐町の観光拠点の一つとなっている。

建物の建築の計画は分家の当主で後に西遊佐村長を勤めた青山米吉に一任し、遊佐町宮田の土門市郎左衛門を棟梁とする人々によって建てられ、地元では【ニシン御殿】と称されている。

建物は主要8室からなり、茶の間～中の間～下座敷～上座敷と続く山形県の庄内地方にはよくある形式である。豪快な瓦葺の切妻屋根、軒は出桁（だしげた）によるせがいで造りで、内部は春慶塗の檜の床や柱、漆喰壁、神代杉の幅広天井やうぐいす張りの廊下、継ぎ目の無い一本物の長押など見ごたえ十分。床の間は紫檀、黒檀、鉄刀木、杉、ツゲを使った書院造り、襖の引手には当時宝石と同価値とされた【七宝焼】が使われている。欄間には竹、紫檀、黒檀に彫刻が施され、日本画の絵師たちが競って描いたふすま絵や書など、贅の限りが尽くされている。母屋の屋根裏にはほかに例を見ない

形式の棟札が掲げられている。



年間を通し、館内や隣接する土蔵には留吉が求めた美術品をはじめとする所蔵品を展示、庄内雑街道に合わせお雛の展示やお茶会などのイベントを企画。事前の申し込みでボランティアガイドの方が邸内を詳しく解説してくれる。



建物名称	旧青山本邸
建築年	1890年（明治23年）
構造・様式	木造平屋建
所在地	山形県飽海郡遊佐町比子字青塚155
電話	0234-75-3145
H P	<a href="http://www.town.yuza.yamagata.jp/culture/heritage/7415d8201.html">http://www.town.yuza.yamagata.jp/culture/heritage/7415d8201.html</a>
開館時間	9：30～16：30
アクセス	J R酒田駅より秋田方面へ車で20分、国道7号青塚地内十字路（看板有り）より左折200m
備考	





清風荘は池泉回遊式庭園（古庭園）として有名な【もみじ公園】の中に建つ市の施設である。秋には見事に色づいたもみじが言葉には尽くせないほどで、さながら京の都を思わせる美しさである。もみじ公園は時の城主松平下総守忠弘が、真言宗の巨剎宝幢寺の庭園を江戸の庭師と共に山形城本丸庭園の余石と、吉野のもみじを用い手を入れた庭とされている。庭園の池は心の文字をかたどったことから【心字池】と名付けられている。清風荘は明治維新以前は宝幢寺（真言宗）の寺院であり大書院であったが、昭和31年に跡地が市によって買収され、中央公民館分館「清風荘」として開館した。昭和54年には数寄屋造りの粋を集めて造られた公共のお茶室「宝紅庵」が併設され、ともに純和風の施設として芸術文化等の諸活動や国際交流などにも広く利用されている。



## 見どころ

### 「清風荘（せいふうそう）」

閑静な住宅街のなかにある市民公園【もみじ公園】があり、その中に「清風荘」は建っている。もとは最上義光の庇護により1370石の寺領を持つ大寺院となった宝幢寺の書院であった。創建当時の建物は400年ほど前に焼失し、1862年（文久2年）に再建された。平成13年には国登録有形文化財として登録されている。最上のお殿様が必勝祈願にお寺にお出でになった際のお控え処として造られた本格書院造りの和室は、落ち着いた雰囲気の中にも荘厳さを秘め緊張感の漂う不思議な空間を感じ取ることができる。

### 「宝紅庵（ほうこうあん）」

昭和54年、数寄屋建築の第一人者【中村昌生】博士の設計により建設された本格的な公共の茶室である。「宝紅庵」は宝幢寺の「宝」、紅葉の「紅」から名付けられた。材に京都北山杉を用いた建物は、小間・広間・鞘の間・水屋・寄付・立礼席などからなり、山形と京都の文化の交流から創り上げられた本格的な茶室となっている。特に立礼席は流派を超えて管理・活用をしており、通年を通しお点前を体験できる。受付時にお願いをすればお茶室の見学も可能で、施設の方が丁寧に解説付きで案内をしてくれる。



建物名称	清風荘-宝江庵
建築年	清風荘：1862年（文久2年）再建 宝江庵：1985年（昭和54年）
構造・様式	木造平屋建
所在地	山形県山形市東原町2-16-7
電話	023-622-3690
H P	<a href="http://www.city.yamagata-yamagata.lg.jp">http://www.city.yamagata-yamagata.lg.jp</a>
開館時間	8：00～22：00
アクセス	山形駅発県庁行 東原3丁目バス停より徒歩約3分
備考	





本間美術館は江戸時代は豪商、明治以降は日本一の地主として知られた【本間家】が創始者となり昭和22年に開館した美術館である。公益の祖として地域に貢献してきた本間家が、敗戦後の人々に美術・文化に接することで元気とゆたかな人生を取り戻してほしいとの意見に賛同した人々との共同作業により実現した。庭園《鶴舞園》は鳥海山を借景として四季折々の風情を織りなし、別荘《清遠閣》の京風木造建築の美しさ、北前船によりもたらされた素材と芸術品の数々は、自然・歴史・芸術が融合する美術館となっている。庭園を通り抜けた先にある本間美術館新館では、本間家に伝わる諸藩からの拝領品の他、古美術から現代美術まで国内外の多種多様な作品を展示紹介している。



## 見どころ

### 《清遠閣（せいえんかく）》

藩主酒井侯の領内巡視の際の休憩所としてつくられ、京風の精緻な造りと手すきの硝子、随所に建築に携わった職人たちの心意気が見て取れる。館内の大正ロマンを偲ばせる数々の調度品は酒田にも度々滞在した詩人で画家の【夢二】の世界を彷彿とさせる。又、酒田の迎賓館としても使用され、昭和天皇が東宮殿下の頃に宿泊された。光と影を巧みに計算しつくした設えは思わずため息が出るほどである。

匠の技と庭園のコラボレーションを是非その目で！

### 《本間氏別邸庭園：鶴舞園（かくぶえん）》

1813年、四代：本間光道築造の池泉回遊式庭園。池の中島に鶴が舞い降りたことから藩主酒井侯により鶴舞園の名を賜ったとのこと。庭園の整備には港で働く人々の冬期間の失業対策事業として行われた。地域貢献を祖先以来の方針としてきた本間家、その精神は今でも【公益の祖】として市民にたたえられている。庭石には北前船が運んだ佐渡の赤玉石や伊予の青石などが配され、新緑から秋の紅葉、冬の雪景色など風情豊かな庭園となっている。



建物名称	本間美術館 清遠閣-鶴舞園
建築年	1813年（文化10年）
構造・様式	木造二階建 池泉回遊式庭園
所在地	山形県酒田市御成町7-7
電話	0234-24-4311
H P	<a href="http://www.homma-museum.or.jp">http://www.homma-museum.or.jp</a>
開館時間	9：00～17：00（入館は16：30迄）
アクセス	J R酒田駅より徒歩5分（駐車場有）
備考	



# 旧甲斐家蔵住宅

福島県喜多方市

きゅうかいけくらじゅうたく



51畳の蔵座敷は、7年の歳月をかけた豪華な造り。書院・本床・脇床を配し、金雲模様の大唐紙がはめ込んである。上段の間の床柱は鉄刀木（たがやさん）と四方杵の檜、次の間は縞黒檀、書院は黒檀、唐紙と障子の戸縁には紫檀と選りすぐりの銘木を用いた造作が随所に見ることができる。

旧甲斐家蔵住宅は、幕末に初代が酒造りを始め、3代目が麴製造、製糸工場を、4代目が味噌・醤油の醸造を営んできた歴史をもつ建物である。上段の間、次の間の間仕切上部に設けられた箴欄間は、一枚の檜板をくり抜いて造られており、奥まで見通せるほど繊細だ。



庭園に入り奥へと進む

ゆったりとした時間が流れる

## 見どころ

細部にわたる意匠のこだわりから客人をもてなす気持ち伝わる



店蔵中央に構えるケヤキの一木から造り出された美しいせん状の吊階段



内装に趣向を凝らした客人用の浴室。浴槽は大理石を使用している



広縁、縁側から中庭へとつながる空間  
ここで多くの客人を迎え入れてきた



照明用のレトロな  
回転スイッチ



歴史を感じる  
ケヤキ床の廊下



座敷にいざなう  
みがき杉丸太の  
竿縁天井



主屋の北座敷は畳床に炉が切られお茶を楽しんでいた様子が伺える



応接室として  
使われてきた  
西洋室



店蔵正面は  
重厚な風格が漂う

建物名称	旧甲斐家蔵住宅
建築年	1923年（大正12年）
構造・様式	木造土塗壁土蔵 切妻 蛇腹付二重屋
所在地	福島県喜多方市字1丁目4611番地
電話	喜多方観光物産協会0241-24-5200 旧甲斐家0241-22-0001
H P	<a href="http://www.kitakata-kanko.jp">http://www.kitakata-kanko.jp</a>
開館時間	9：00～17：00（最終入館16：30）
アクセス	磐越西線喜多方駅から徒歩で30分 磐越道会津若松ICから車で25分、駐車場有
備考	蔵座敷・店蔵・醤油蔵（国登録有形文化財）





嶋貫家の先祖は上杉家の家臣であったと伝えられている。江戸時代に士族となり福島の下飯坂に移り住み、後に商売をするために奥州街道の宿場町として賑わった瀬上に居をかまえ、金融業・酒造業・質屋などを営んでいた。母屋は明治32年に建てられた商家造りで、大正2年に来賓専用の宿泊部屋として離れが増築された。総2階建てで、街道側は急勾配の切妻屋根に破風・飾り・下見板張りの外壁、腰板瓦屋根の連続性と重厚感が目を引くと同時に明治期のモダンな建物としての風格も感じる。建物の内部は、銘木を贅沢に使った40帖の大広間、細部の造作が粋で上質な和室、壁と天井の漆喰の色合いのバランスと装飾が見事な洋間などそれぞれに見応えがあり、贅を尽くした空間に職人の高い技術とセンスがうかがえる。十一代当主ご夫妻による3年がかりの復元・改修工事によって当時の趣を取戻し、個人の所有物であるが平成22年より一般公開を始める。翌年の東日本大震災で被害を受けたのを機に歴史の大切さを実感し、平成25年「国登録有形文化財」に登録。また「ふくしまの旧家を活かす会」の発起人のひとりとして、福島市の歴史的建造物・古民家の保存を唱え、活動を続けている。

瀬上嶋貫本家は、保存と活用の両輪で伝統的な旧家と土地の歴史を多くの人に伝えている。歴史的にも文化的にもその価値が高く、後世に引き継ぐための貴重な建物である。

## 見どころ

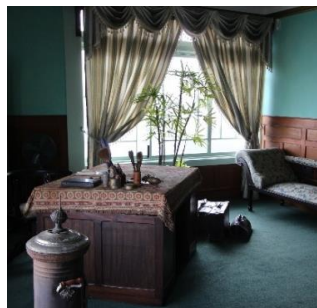
部屋毎の意匠に趣向が凝らされており、銘木がふんだんに使われている。床の間・付書院・折り上げ天井・欄間建具などの細部に職人の技が光る。障子窓から見える季節によって変わりゆく庭の風景を楽しんだであろう当時の風情のある暮らしぶりが偲ばれる。着物・筆筒、金庫電話機などの調度品や貴重な資料が大切に保存・展示されていて、当時の息づかいが伝わってくるようだ。



モダンな洋間は漆喰のレリーフで仕上げた天井飾りに細部にこだわったレトロな照明が美しく映える。家具や調度品に主のこだわりを感じる。



屋根瓦の棟飾りには施主がいろいろな意を込めるとされている。母屋の薬師門に乗っている「桃」は不老長寿、妻飾りの「猪の目」は火伏せ祈念など、家族を思う主と職人の粋な遊び心に触れることができる。



右)40帖の大広間  
黒柿などの厳選された銘木を使った歴史と格式を感じる大空間  
現在は展示会・教室・コンサート会場として利用されている  
左)当主の執務室であった洋間  
青と白の漆喰の色の対比と装飾技術などのクオリティーの高い空間



建物名称	瀬上嶋貫本家
建築年	1899年(明治32年)
構造・様式	木造二階建 銅版葺
所在地	福島県福島市瀬上町字本町90-2
電話	090-2273-5001(受付時間10:00~16:00)
H P	<a href="https://shimanukihonke.com/">https://shimanukihonke.com/</a>
開館時間	予約制(10:00~16:00)
アクセス	福島駅より車で20分
備考	国登録有形文化財





福島県迎賓館は、大正天皇第三皇子・高松宮宣仁親王殿下が、喜久子妃殿下の母方祖母に当たる有栖川宮威仁親王妃慰子殿下のご保養のために、1922年（大正11年）に建設されたものである。現在、福島県では保存・保護を図りながら、貴重な皇族の別邸として、文化遺産を継承していくため、庭園を公開している。さらに、国指定重要文化財としての価値を紹介するため、期間限定で特別公開を実施している。



## 見どころ

木造、平屋建て、小屋組みは和小屋で京呂組である。居間、寢所を中心とした居住棟を東西方向に配し、南北方向に客座敷棟、台所棟があり、中庭を囲む形となる。奥の松の間、梅の間、竹の間で構成される居住空間は床の高さが他より一段高く上段形式になっている。

主要なる造作材は竹の間を除いてほとんどが桧材を用いている。屋根は銅板葺（もとはこけら葺）で、主要棟および住棟に付く竹の間、湯殿は寄せ棟造であるが、表玄関の突出部は入母屋造、長局の湯殿は切妻造である。

個々の建築の構造は入念にして堅実、その意匠は洗練され、すみずみまで神経の行き届いた、贅を盡したものである。妃殿下の別荘にふさわしい典雅にして格調の高いものになっている。



「玄関の間」より式台



「客の間」の屋久杉柵欄間  
源氏香の文様を散らしてある



「梅の間」の板欄間(秋田杉)  
デザインは磐梯山と猪苗代湖



「客の間」上ノ間 床柱 桧  
釘隠金物・梅のデザイン



廊下 竹ノ節欄間 黒漆



畳表は備後産の蘭草  
畳縁は紫紋で紋合わせ仕上げ



南の廊下

妃殿下が歩く畳部分と使用者が歩く床板が分けてあるのが印象的

- 大正11年 有栖川宮威仁親王妃慰子殿下の御保養のために、建てられた純日本風の御別邸である。
- 大正13年 高松宮宣仁親王殿下が有栖川宮の祭祀を御継承されるとともに、御別邸も同親王殿下が引き継がれた。
- 昭和27年 高松宮宣仁親王殿下より福島県に御下賜され、県の賓客の御宿泊・休憩に利用してきた。

### 【松の間】

松の間は上、下の2室より構成される。上座敷は8畳、下座敷は10畳。屋の御座所、即ち居間書院で、前方に猪苗代湖が見渡せる。壁は美濃紙の紙張りで黒漆喰の押縁を付けている。



### 【梅の間】

梅の間は休息所であり寢所である。壁は美濃紙の紙張り、押縁はじめ、欄間の框、とこ框、襖類の縁などすべて朱塗漆を用い、襖類の取手、長押釘隠は女性らしく梅の意匠で統一している。



### 【竹の間】

4畳半の数寄屋造建築。茶室であり、また、湯殿とも接していて、化粧の間とも称され慰子妃の私室である。地袋の天板には神代杉の玉杵を用い、小襖絵に竹を描く。襖の取手、長押の釘隠しは竹のデザインである。



建物名称	福島県迎賓館(旧高松宮翁島別邸)
建築年	1922年(大正11年)
構造・様式	木造平屋建 寄棟造 上層貴族住宅
所在地	福島県耶麻郡猪苗代町翁沢字畑田1074-4
電話	【天鏡閣】0242-65-2811
H P	<a href="http://www.tif.ne.jp/geihinkan/">http://www.tif.ne.jp/geihinkan/</a>
開館時間	特別公開時に見学可
アクセス	磐越西線猪苗代駅下車・駅前より磐越東都バスで約15分・長浜下車徒歩5分
備考	国指定重要文化財